

“世界の日本” —— 内村の国際性

英語ができることは人を国際人にしない。また国際人とは民族的・文化的アイデンティティを放棄した人のことではない。内村は一見ナショナリストイックに見えるほどに、ナショナルな人であった。彼は告白している。

I love two J's and no third; One is Jesus, and the other is Japan . I do not know which I love more, Jesus or Japan

(私は二つのJを愛する。その他を愛さない。一つはイエスであり、他は日本である。私はイエスと日本の、いずれをより愛しているかを知らない)。²⁰

では、この内村をインターナショナルにしているものは何か。文学を論じた一篇において、内村は日本に真の文学がないゆえんを説き、しかしながら、それを克服して日本人が大文学を生み出す可能性は十分にあるとして、要は世界精神の涵養と注入とにあるのみ、²¹と結論している。これは何も文学のことに限らない。自己完結的な日本の文化が、世界において普遍的価値を獲得する道があるとすれば、それはただ“世界精神の涵養と注入”とによって、その精神的価値を徹底的に相対化する以外にない。なぜなら“世界精神”とは個別を普遍へと高める力だからである。こうした内村の国際感覚は彼の(とくに英文)著作の至るところに看取できる。

個別が普遍へと高められるとき、そこには葛藤があり戦いがある。厳しい自己批判も求められるであろう。次に掲げる内村の日本道徳批判は、その一例である。

One most conspicuous lack of Japanese morality is that it teaches too much of the duty of the inferior towards the superior, and too little, if any, of the duty of the superior towards the inferior. We are bound upwards, and free downwards. Stiff in head and loose in feet, the society built upon such a principle must necessarily be very unsteady. Can

the representative form of government, founded as it is on the people's sense of their own individual worth, be expected to be effectual for any great length of time in a country so constituted as Japan is ?

(日本の道徳に一つ決定的に欠けているものは、それが下の者や上の者に対する義務を教えるのに急で、上の者の下の者に対する義務については、たとえあるとしても、ごくわずかしか教えるところがないということである。……日本人は上に対しては厳しく律せられるが、下に対しては実に自由である。いわば頭の方が固くて、足許がゆるい。このような原理の上に建てられている社会が極めて不安定であるのは当然である。……日本のような社会制度をもつ国において、そもそも国民に個人の尊厳という観念があることを前提にして成り立つ代議政体というものが、果たして長期にわたって有効でありうるだろうか。) ²²
内村がここに指摘した問題が、そのまま現代日本人の問題であることは、いまさら言うまでもないであろう。

日本語における横文字の氾濫は識者のひんしゆくを買っているが、内村はこの点でもなかなか進歩的で、

“なんぞ直ちにローマ字を採用してわが国の同化力を増大せざる”とまで言っている。ただし彼の言う外国語の採用は、“物品の名称”ではなく“思想の語”のことである。内村の大胆な、そしてユーモア溢れるローマ字の名文を紹介しておこう。

Sublime naru Fuji yo, ware nanji wo nozomite waga kokoro uchi ni ugoku. Ware ni Cromwell no liberty wo atayeyo, ware ni Wordsworth no inspiration wo kudaseyo; Ware wa imagination no tsubasa ni norite, Dai Nippon no mirai wo utawan. ²³

“同化力の増大”は、しかし、日本が一方向的に他

国の文化を受け入れるというだけのことではない。むしろそれによって、より良く日本の精神的伝統の真価を世界に知らしめ、その価値をして“世界精神”の確かな一部たらしめることである。内村没後半世紀のいまも、日本の文化交流はほとんど受容一方であると批判されているが、内村は早くから日本人の文化と思想とを世界に紹介しようと努めた先覚であった。“Japan Christian Intelligencer”の発刊に当たって述べた次のことばは、よく彼の意図を語っている。

The J.C.I. is an attempt to make known to the world what we consider to be the best in Japan, and so to make a little contribution to the world-thought and the world-progress.

(本誌は、我々が日本における最善と思うものを世界に知らしめ、少しなりと世界の思想と世界の進歩に貢献せんとする一つの試みであります。) ²⁴

それでは、日本は世界に対して何を貢献しうるか、いや貢献すべきであろうか。

Japan is not greater for her possible extension of her territories over the eastern borders of Asia. Japan is greater for her larger service to humanity, for her fuller accomplishment of her mission, for her high virtue and nobler civilization. When other nations glory in their ironclads, and dominions that encircle the terrestrial globe, glory shall it be to Japan if she can trust in her integrity, and be great in moral sphere. Japan with her insular position can be an example of a united race, a harbinger of the West to the East, and advocate of the East to the West.

(日本はその領土をアジアの東域に拡大しえたからといって、より偉大であるというわけではない。日本が人類全体に対してより大きな奉仕をなし、よりよくその使命を達成し、その徳においてより高く、その文明においてより気高くあってこそ、より偉大なのである。他の国々がその軍隊を誇り、地球をとり囲むその支配を誇る時、日本がなおその誠実にたより、道徳の領域において偉大であれば、



1928年6月、ともに英語で学んだ札幌農学校の旧友たちと。中央内村、68歳。

栄光は日本に帰せらるべきである。……日本はその孤立した位置のゆえに、……一つのまとまった国民として、西を東へ伝える先駆者、そして西に対しては東の代弁者という一つの範例たりうるのではないだろうか) ²⁵

内村の先見は裏切られ、日本は軍事力をもって偉大になろうとして挫折した。しかし幸いにしてその教訓を生かし、いまや平和国家として再生しつつある。今後の日本に課された問題は、その徳と文化とをもって、いかに“世界精神”と世界の平和に貢献するかということであろう。内村はいまなお、いやいまこそ、以上見てきたような、その謙虚で強靱な国際性をもって、彼の愛する日本人に訴えている。

The world's Japan; not Japan's world. Japan for the world; not the world for Japan. Japan's greatness lies in its full recognition of the duty of subordination of its interest to that of the world.

(世界の日本であって、日本の世界ではない。日本は世界のためであって、世界が日本のためにあるのではない。日本の偉大さは、その国益を世界の益に従わせる義務を十分に認識していることにこそあるのである。……) ²⁶

注

20 “Two Js” “英・4” P.54。訳は筆者。

21 “何ゆえに大文学は出でざるか” “信・5”

P.140 ff。訳は筆者。

22 "Lack of Japanese Morality" "英・5" P. 140ff。

訳は筆者。

23 "外国語の研究" の一節。"信・5" P. 214。

「同化力」の傍点は筆者。

24 "Japan's Best" "英・4" P. 14。訳は筆者。

25 "The Greater Japan" "英・5" P.112。

訳は筆者。

26 "The World and Japan" "英・4" P. 36f。

訳は筆者。

(所載) 「 YMCA English Quarterly 」 No.15

1982 年 日本 YMCA 同盟